

## 異文化教育理念の細分化と具象化を目指した教師教育の展開 —中国を中心に—

成 利楽 (長崎外国語大学)

道法愛<sup>1</sup> (広島大学 大学院生)

### 1. 活動動機と研究課題

文化教育は外国語教育において重要な位置を占めています。日本のアニメ、漫画、J-POPといった日本文化に対する関心や興味は、日本語学習を始める、また継続する重要な動機となっています(山方・井上、2017)。しかしながら、日本文化教育には共通して指摘されている問題があります。

まず一つは、知識伝達型の文化教育に止まっている現状があります。佐々木(2002)によれば、日本語教育における文化教育は「所産・知識としての文化」のほかに、「他者との総合作用に介在する文化」「個としての文化」を実現するための高次的な能力の育成も必要であるとされています。しかし、中国の場合、日本文化を教える授業である「日本概況」は、「日本」という国の関連情報を伝達するための「知識としての文化」を教える授業に止まっているという指摘があります(葛、2015；周、2015)。現在中国における異文化教育の現状を明らかにするには、異文化教育実践の目的に対する教師の認識や実践現状を調査する必要があります。

もう一つの問題として、国レベルの教育理念に対する教師の理解を促進し、それを行動へと繋げることとはとても難しい(周、2015；中尾、2016)ということが挙げられます。例えば、中国の外国語教育方針を示す『高等教育段階日本語専攻教学指南』(2020)(以下『指南』と略す)では、「異文化理解能力及び異文化コミュニケーション能力の向上」との記述はありますが、具体的にはどのような下位能力が含まれているのかが明確ではありません。そのため、『指南』(2020)の作成に携わった日本語教育の専門家が思う「異文化理解能力及び異文化コミュニケーション能力の向上」には具体的にはどのような下位能力が含まれて

いるのかを調べる必要があると考えられます。そして、教師研修を行い、細分化された『指南』(2020)の異文化教育理念に対する教師の理解を促進し、それを行動へと繋げるように手助けをする必要もあります。

以上の問題意識に基づき、本プロジェクトの目的を、(1)異文化教育に対する教師の認識と実践の現状の解明、(2)国レベルの文化教育概念の細分化；(3)細分化された内容に基づいた教師教育実践の展開；とします。また、研究課題を

(1)現在中国における日本語教師の異文化教育能力に対する認識や授業実践の現状はどのようなものか、(2)『指南』(2020)で言及されている異文化教育能力にはどのような下位能力が含まれているのか、(3)『指南』(2020)で言及されている異文化教育能力を実践につなげるためにどのような教師教育実践が必要なのか、とします。

中国を対象に選んだ理由としては、学習者と日本語教師が最も多いこと、また、言語教育方針である『指南』が2020年に更新され、文化教育に関連する内容が示されていることが挙げられます。

### 2. 異文化教育能力に対する認識や授業実践の現状

#### 2-1 調査方法

課題1の「現在中国における日本語教師の異文化教育能力に対する認識や授業実践の現状はどのようなものか」を明らかにするために、主に以下の活動を行いました。

- 教師を対象とした異文化教育の目的をめぐるアンケート調査の実施(意識レベル)
- 教師の授業見学(行動レベル)

具体的には、主に以下の活動を行いました。

まず、103名の教師にアンケート調査を行い、日本語教師の異文化教育観（この報告では、異文化教育観のことを「異文化教育の目的は何か」と定義する）を調べました。調査データを因子分析し、中国における大学日本語教師の考える異文化教育の目的の構成概念を明らかにしました。

次に、都市部である上海のA大学のA先生と地方である湖南省のB大学のB教師の授業を見学し、現場ではどのような異文化教育が行われているのかを観察しました。その後インタビューを通して、教師が持っている異文化教育観と授業実践の間にズレがないか確認しました。

## 2-2 調査結果1：中国における日本語教師の考える異文化教育の目的

アンケート用紙を作成するために、まず日本語教師8名を対象に予備調査を行いました。予備調査では教師に自身の考える異文化教育の目的について自由記述してもらいました。その後、教師教育者L氏の解説、異文化教育関連の先行研究、8名の教師を対象とした予備調査の結果をもとに、中国における異文化教育の目的意識に関する質問項目を計32問作成しました。

表1. 異文化教育の目的意識を調べる項目

1. 日本語学習に対する学生の興味や関心を刺激できる。	11. 中国文化に対する学生の理解を深め、中国人としてのアイデンティティを強化させ、中国の文化価値への自信を高めることができる。
2. 学生が中国文化を広げて、日本語で中国の「声」を伝えることができる。	12. 文化理解と学習を通じて、言語そのものへの理解を深めることができる。
3. 学生が中国の文化を客観的に見ることができる。	13. 学生が異文化の特徴と異文化を持つ人々の行動を理解できる。
4. 学生が外国文化の真髄を学ぶことができる。	14. 学生個人の文化リテラシーを高めることができる。
5. 学生が多角的に考えることができる。	15. 学生が多様な文化現象、テキスト、製品 <sup>3</sup> に含まれる文化的価値を解釈できる。
6. 学生が中国では当然と思われることを批判的に見ることができる。	16. 学生が外国の文化を客観的に見ることができる。
7. 学生と他国の人々との交流を促進できる。	17. 学生が文化的関連情報を見つけ出すことができる。
8. 教師が異文化教育実践を通して、教えること、学ぶこと、研究することの統合を実現できる。	18. 学生が文化的関連情報を識別することができる。
9. 学生の国際的視野を広げ、認知力と思考力を高めることができる。	19. 異文化コミュニケーション場面における学生の日本語運用能力を向上できる
10. 文化学習の視点から、日本語という言語に対す	20. 学生が異文化間コミュニケーションに困難を抱える者同士の間で調整・仲介役を担うことができる。
	21. 学生が他者と対等な立場で他者と接することができる。
	22. 学生が多様な文化現象、テキスト、製品に含まれる価値を評価・分析できる。
	23. 学生が異文化コミュニケーションの理論と中国の実情を結び付け、中国社会に根付いた学習活動と研究活動を行うことができる。
	24. 学生の他者から文化的情報を読み取る能力を育成することができる。
	25. 学生が外国語を使って、異なる背景を持つ人々に異文化コミュニケーションサービス <sup>4</sup> を提供できる。
	26. 学生の異文化に対する観察力を養うことができる。
	27. 学生が欧米における異文化研究の理論的知識と方法を批判的に学ぶことができる。
	28. 学生の将来の就職のための準備になる。
	29. 学生が将来、新しい環境（留学、職場など）に適

る学生の認識を深めることができる。

応できるための準備になる。

30. 学生が自国文化と異文化の違いが理解できる。
31. 教師が伝統的な外国語教授法にとどまらず、外国文化の理解に資することにより効果的な外国語教授法が探求できる。
32. 学生が日本人と交流する際に起こりうる誤解を理解できる。

本調査は2023年12月～2023年1月に行いました。「下記の異文化教育の目的について、あなたの考えに当てはまると思う程度を選んでください。『5.非常に当てはまる～1.あてはまらない』の5件法を用いました。主に日本語教師のオンラインコミュニティ（Wechatの日本語教育関係者グループ）にアンケートのURLを送り、回答協力の依頼をしました。最終的に中国の大学で日本語を教える専任日本語教師103名から回答を得ました。

103名のデータを記述統計と因子分析を行いました。因子分析の結果、6つの因子を抽出しました。それぞれの因子の共通点からそれぞれを以下のように命名しました。

- 因子1：異文化関連の認知能力の向上
- 因子2：異文化関連の実践力の育成
- 因子3：異文化教育力・学習能力の向上
- 因子4：異文化適応力の向上
- 因子5：自国文化の伝達
- 因子6：自国文化の再認識

因子1の「異文化関連の認知能力の向上」は主に、「9.学生の国際的視野を広げ、認知力と思考力を高めることができる。」「16.学生が外国の文化を客観的に見ることができる。」「15.学生が多様な文化現象、テキスト、製品に含まれる文化的価値を解釈できる。」といった異文化知識の拡充とそれに伴う異文化を認識・解釈する認知能力の向上に関する項目が含まれています。

因子2の「異文化関連の実践力の育成」は主に「22.学生が多様な文化現象、テキスト、製品に含まれる価値を評価・分析できる。」「27.学生が欧米における異文化研究の理論的知識と方法を批判的に学ぶことができる。」「20.学生が異文化間コ

ミュニケーションに困難を抱える者同士の間で調整・仲介役を担うことができる。」「25.学生が外国語を使って、異なる背景を持つ人々に異文化コミュニケーションサービスを提供できる。」といった異文化に対する評価力と異文化場面における実践能力に関する項目が含まれています。

因子3の「異文化教育力・学習能力の向上」は主に、「8.教師が異文化教育実践を通して、教える・学ぶ・研究することの統合を実現できる。」

「31.教師が伝統的な外国語教授法にとどまらず、外国文化の理解に資するより効果的な外国語教授法が探求できる。」「17.学生が文化的関連情報を見つけ出すことができる。」「23.学生が異文化コミュニケーションの理論と中国の実情を結び付け、中国に根付いた実践と研究を行うことができる。」といった教師の異文化教育力と学生の異文化学習力に関する項目が含まれています。

因子4の「異文化適応力の向上」は主に「26.学生の異文化に対する観察力を養うことができる。」

「32.学生が日本人と交流する際に起こりうる誤解を理解できる。」の2項目が含まれています。

因子5の「自国文化の伝達」は「11.中国文化に対する学生の理解を深め、中国人としてのアイデンティティを強化させ、中国の文化価値への自信を高めることができる。」「2.学生が中国文化を広げて、日本語で中国の『声』を伝えることができる。」の2項目が含まれています。

因子6の「自国文化の再認識」は「3.学生が中国の文化を客観的に見ることができる。」「4.学生が外国文化の真髄を学ぶことができる。」「6.学生が中国では当然と思われていることを批判的に見ることができる。」の3項目が含まれています。

## 2-3 調査結果2：中国における日本語教師の考える異文化教育の現状

現場の教師がどのような異文化教育実践を行っているのかを調べるために、二人の先生の授業を見学しました。A先生（上海の大学、日本人教師）は主に、日本人の「歩く」文化と中国人の「乗る」文化を比較しながら、学習者にその歴史的な背景と地理的背景を説明しました。日本と中国の

差異を学生に伝えることが主な目的であると A 先生は述べていました。

「歩く文化」と「乗る文化」

中国の大学を見て驚いたこと

- ・ 学内を電動バイクで移動する
  - ・ 学内の自転車移動ですら一般的でない日本
  - ・ 筑波大学などの一部大学ではみられるが、全国では少数派
- ・ ちよつとの距離でも何かに乗る
  - ・ ここから五角場の距離でも徒歩が多い日本人
  - ・ タクシーを呼ぶ頻度も中国の人々は高い
- ・ シェアサイクルの発達度が高い
  - ・ 乗り捨てがどこでも可能なうえ、安い
  - ・ 東京で利用すると乗り捨て地点が決められているうえ、一回110円(5.5元)～



3

「歩く文化」と「乗る文化」

現代日本にもみられる「徒歩」

- ・ これまでの「移動」の要約
  - ・ 中国 → 国土が広く、スピードが重視。政治や経済的な側面があった
  - ・ 日本 → 山地が多く、ゆっくりとした観光が目的。文化的な側面が大きい
- ・ 「ウォーキング」が盛んな日本
  - ・ 全国各地でウォーキング大会が開催 (<https://iwalking.jp/>)
  - ・ JR東海が主催するウォーキング大会では徒歩に行くための臨時列車まで設定
  - ・ 中には100キロ以上を歩き通すもの
  - ・ 「今後行ってみたい運動・スポーツ」でも毎回トップに挙げられている

21

図1 A先生の授業資料(一部抜粋)

B先生(湖南省の大学、中国人教師)は日本の冠婚葬祭をテーマにして、人生の節目ごとに日本人はどのようなことをするかについて説明しました。加えて、「鯉のぼり」を例にして、自分が留学生として感じた「今の日本文化」と「中国の文化教科書に書いてある日本の文化」の間のずれについても説明しました。主な授業目的は、文化というのは変化するものであるということを学生に知ってもらうことだと述べていました。



図2 B先生の授業資料(一部抜粋)

授業終了後、『指南』における異文化教育に理念についてどれほど知っているかを二人の先生に聞いたところ、あまり知らないと答えていました。A先生は、「見たことはありますが、ちゃん

と読んだことはありません。そして、現時点では『指南』のことをあまり意識していません」と答えました。B先生は、論文の中で関連する記述を見かけたことはありますが、その一部の内容に疑問を持っていると言っていました。具体的には、異文化を批判的に見る必要性や異文化を評価する必要性に疑念を抱いていること、また、異文化教育の言語学習の融合というのが何を表すのかが不明であることなどを述べていました。

2人の先生の授業現場、あるいはその録画を筆者と長年異文化教育の実践に携わってきた曾琴先生<sup>7</sup>が観察、また、視聴しました。その結果、A先生もB先生も授業中、学習者とのインターアクションが1~2回に留まりました。観察を通して、PPTを使って日本、あるいは日本や中国の文化に関する知識の伝達を目的としている授業であったと授業観察者2人が共通して感じました。先述したように、A先生もB先生も授業目的を日本と中国の文化の知識の伝達と設定していました。このように、授業目的に関しては、授業実施者の行動面(観察者による評価)と授業実施者の意識面(インタビューの結果)が一致していることがわかりました。

### 3. 『指南』における異文化教育能力の細分化

#### 3-1 調査方法

課題1の「『指南』で言及されている異文化教育能力にはどのような下位能力が含まれているのか」を明らかにするために、『指南』の作成に携わった教師教育者L氏が提供した材料を分析しました。当初は、教師教育者L氏にインタビュー調査を行う予定だったため、インタビュー質問を11月に送りました。その後、教師教育者L氏が最近『指南』における異文化教育をテーマとした教師研修会を実施し、その資料にインタビューに関連する質問や内容があるので、それを確認するように言われました。そのため、当初の予定を変更し、教師教育者L氏からもらった資料を確認し、調査に関連する内容を抽出しました。そして、抽出した内容と不明な点をメールでL氏に確認を取りました。教師教育者L氏には主に、



(1)『指南』における異文化能力とは何か、(2)教師教育者の立場から見る異文化教育の目的とその具体例について質問しました。

### 3-2 調査結果3:教師教育者から見る『指南』における異文化教育理念の諸相

教師教育者 L 氏は異文化能力と異文化教育の目的について、異文化能力は主に異文化態度、異文化知識、異文化スキルと批判的文化意識に大別できると述べていました。異文化教育の目的については、異文化を知り、理解するといった受容レベルの知識、スキル、態度の育成だけでなく、異なる文化が混じり合う中で、ローカル文化の再構成と再生産も重要な目的の一つであると説明していました。例えば、日本と中国の文化の比較を通して、中国文化の再認識を促すと同時に、中国文化を外国語で伝えることも重要な目的の一つであると解説しました。加えて、外国語学習と文化知識の学習、思弁力 8 の育成を同時に視野に入れることも重要であると指摘していました。例えば、CLIL (内容言語統合型学習) や CBI (内容重視型の言語教育) のような言語と内容の習得を統合し、平行させる教育実践が重要であることを強調しました。つまり、異文化教育の重要な側面は、文化関連の知識・スキル・態度を育むだけでなく、異文化を媒介としながら学生の言語技能の育成も同時並行しなければならないと考えられます。

研修会では、まず『指南』における異文化教育理念を教室実践に反映させる際に生じた教師の困難点を確認し、『指南』における異文化教育理念についての教師の疑問点を確認しました。その後、CLIL (言語内容統合型学習、以下 CLIL とする) という授業方法を例にして、『指南』の方針を取り入れた異文化教育の授業を参加者に見せました。加えて、CLIL の授業実践と『指南』の文化教育方針との関連性を説明し、抽象的な理念の具象化を試みました。

### 4-2 実施結果:異文化教育実践の細分化と具象化を目指した教師研修会

今回はワークショップを予定していたため、少人数の教師の参加が望ましいと判断しました。そのため、本調査に協力した教師の中から、教師研修会の内容をアンケートの最後に説明した上で、参加に関心のある先生にメールアドレスを求める形式で参加者を募集しました。回答を確認したところ、29名の先生からの応募がありました。

教師研修会は2024年1月8日にオンライン会議ツール ZOOM を使って行いました。当日は筆者と講師の曾琴先生を除いて、8名が参加しました。また、研修会の実施日が中国の期末試験期間と重なっているため、当日は参加できないが、レコーディングを送ってほしいと何人かの応募者から連絡が来ました。

## 4. 日本語教師を対象とした教師研修会

### 4-1 実施方法

課題3の『『指南』で言及されている異文化教育能力を教師が授業で実践するためにどのような教師教育実践が必要なのか』を探るために、『指南』の細分化と具象化を目指した教師研修会を実施しました。研修会の流れは以下の通りです。

- 『指南』における異文化教育理念に対する教師の理解の確認
- CLIL 授業の録画の視聴
- CLIL と『指南』における異文化教育理念の関連性の説明
- 研修内容についての質疑応答



図3 教師に配布したポスター

教師研修会は主に以下の4部構成でした。

### ① 調査報告

本調査で収集した異文化教育の目的認識調査のデータを分析し、異なる異文化教育歴を持つ(新人、中堅、熟練)教師の考える異文化教育観の特徴を報告しました。その目的は、参加者に自分と同じ異文化教育歴の教師が持つ異文化教育観と自身の考えの間にどのような類似点と相違点があるのかを考えてもらうことです。

### ②『指南』における異文化教育理念に関する疑問点の討論

『指南』における異文化教育関連の内容を抜粋し、研修参加者にその詳細を説明しました。その後、参加者に読んだ感想と自身が感じる疑問点や不明点を共有してもらいました。参加者からは、「文言が抽象的で、教育現場との関連性がよくわからない」、「『批判的』『思弁能力』などの用語の意味がわからない」などの声が多くあがりました。この活動を通して、『指南』における異文化教育関連の内容に対する教師の問題意識を明確にすることができました。

### ③CLIL 授業の見学

曾琴先生は自身の実践した CLIL の授業風の録画を参加者に見せながら、各授業活動の内容や目的、学習者の反応、気をつけるべき点などについて丁寧に説明しました。



図4 CLILの授業実践の様子(録画)

授業の様子を一通り参加者に見せたうえで、CLIL という教育方法の理念の説明と授業実践への反映、『指南』とのつながりを説明しました。

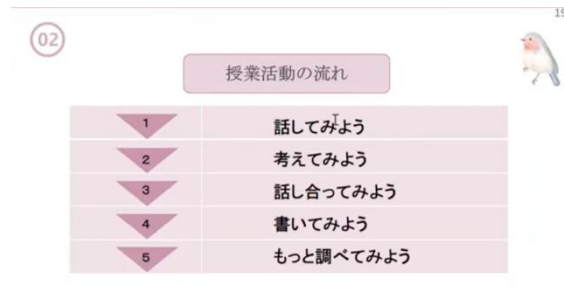


表4 授業の流れ

Step1	導入：クイズや、音楽、読解きゲームで興味喚起(写真やニュース、漫画などで真正性のある資料の提示)
Step2	ウォームアップ(既知知識の活性化)：既存の日本語知識と行事内容に関する知識と経験(行事の体験)の喚起
Step3	インプット：行事文化に関する材料の視聴や読解を通して、行事内容への理解
Step4	アウトプット：相違点や類似点を探そうといったタスク(グループ・ディスカッション)と発表(比較→疑問→意見・感想→共有(表出))
Step5	評価とまとめ：発表への評価と教師による内容全体へのまとめ

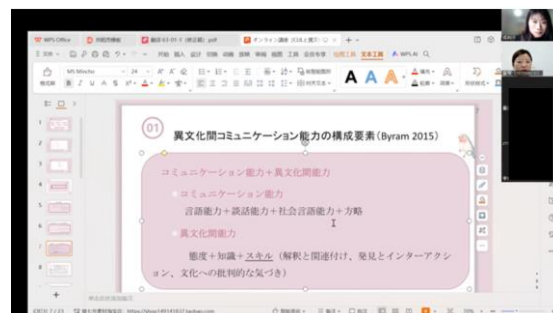


図5 CLILの理念と授業

### ④質疑応答：『指南』と CLIL と「私の実践」とのつながり

CLIL 授業の見学の後、質疑応答の時間を設けました。曾琴先生は CLIL の教育理念や CLIL の授業実践について、参加者からの質問に答えました。その後、参加者に今回の研修内容を自身の教育実践に移行させるための手助けとして、「現在は異文化教育に携わっているのか」「どのような課題を抱えているのか」を中心に参加者と研修実施者の間で意見交換を行いました。参加者の中には、現在異文化教育関連の授業を担当している先生やこれから担当する予定のある先生がいました。参加者の主な関心事は、CLIL はどのような学習者に向いているのか、CLIL の授業活動はほかの授業(たとえば、精読)に導入できるのか、授業やカリキュラムの一部のみに取り入れることは可能なのか、CLIL 授業を行うための教材や教具の入手方法、新しい教育理論の入手方法とそ

れを自分の授業に取り入れる際の注意点は何かなどでした。上記の質問に対して、曾琴先生と筆者が分担して回答しました。後半の議論が非常に活発に行われ、本来1時間半を予定していた研修会が最終的に2時間半で終わりました。

## 5. 考察：国レベルの異文化教育理念の細分化と具象化を目指すには

今回の実践の主な目的は、国レベルの新しい文化教育理念を教育現場に落とし込むための手助けをすることでした。そのために、(1) 現状調査：アンケート調査や授業見学を通じた異文化教育の現状の把握、(2) 教育理念の細分化：教師教育者による『指南』における新しい異文化教育理念の解説、(3) 教師研修の実施：教師研修を通じた『指南』における異文化教育理念具象化と実践へつなげるためのサポートの提供という3つの手順を踏まえて、段階的に活動をデザインし、実施しました。最後に、以上の調査結果や活動をもとに、国レベルの異文化教育理念の細分化と具象化を目指すに必要なことについて考察したいと思います。

まず、今回の調査で『指南』における異文化教育理念をめぐり、教師教育者、あるいは理念の考案者と現場の教師の間のズレを確認できました。『指南』をあまり読まない、読んでもその記述がよくわからない教師は少なくありませんでした。今後、『指南』における異文化教育理念をより多くの現場の教師に知ってもらうための教師研修会の実施が必要であると考えられます。

また、教師教育者と現場の教師が異文化教育の目的に対する認識の間にもズレを確認できました。異文化関連の認知力や実践力、そしてローカル文化の再認識といった点においては両者の認識は共通していますが、異文化教育と言語学習の融合に関しては、「両者をどうやって融合させるかイメージできない」と疑問に思う先生の声もありました。加えて、教師を対象としたアンケート調査のデータを因子分析したところ、異文化教育と言語学習の融合に関連する質問項目「1.日本語学習に対する学生の興味や関心を刺激できる。」

「12.文化理解と学習を通じて、言語そのものへの理解を深めることができる。」といった項目は負荷量が低いため、因子として抽出することができませんでした。このことから、中国の日本語教師が異文化教育の目的として考える際、異文化教育と言語学習の統合が中国の日本語教師が考える異文化教育の目的要因の一つではない可能性が考えられます。このように、異文化教育の目的に関して異文化教育と言語学習の統合という面において教師教育者と現場の教師認識の間にズレがあることが確認できました。今後、異文化教育と言語学習の統合に特化した異文化教育関連の教師研修が求められます。

一方、研修会で CLIL の授業を見学したあと、CLIL は異文化教育と言語学習を融合させる具体例としてとても分かりやすく、両者を併用させるとはどういうことをイメージできるようになったという参加者の声がありました。このことは、研修会の中で曾琴先生が実践の様子を見せながら、CLIL の理論的背景や『指南』との関連性を同時に説明すること、つまり、実践と理論を往還させながら教師教育を行えたことで実現できたと思います。よって、新しい文化教育理念を現場の先生に触れさせる機会を増やすことが重要であると同時に、実践的要素と理論的要素を両輪にした研修会も欠かせません。

最後に、共同研究者である曾氏と筆者が A 先生と B 先生の授業の見学した結果、「知識としての日本文化」を伝達することが主目的であるという授業スタイルが採用されたことが確認できました。このことは二人が答えた授業目的と一致しています。二人とも異文化教育の経験が少ないということに起因しているかもしれません。今後異文化教育の経験が豊富な先生の授業を見学し、その目的意識と実際の授業実践の間にズレがないか確認する必要があるかもしれません。

## 6. 終わりに

初めての教師教育実践で、いろいろと試行錯誤しました。事前に計画していたプログラムを実行しているうちに、変更した方がいい点や変更せざ



るを得ない点が多くありました。本来は教師教育者L氏を招いて、教師研修会で『指南』における異文化教育の理念について具体的に説明してもらう予定でした。しかし、もらった資料の中で解説が詳細に記述されていたため、教師教育者L氏の資料で例示されたCLILという教育方法にフォーカスして教師研修を行うことに変更しました。研修会で参加者が1時間近くCLILの授業実践について話し合い、その後も連絡を取り合っていることが今回の研修内容を変更して良かった証の一つなのではないかと思えます。

最初は、新人日本語教師（筆者は2023年の10月から日本語教師として働きはじめました）であり、日本語教育と教師教育についての専門知も実践知も少ない自分が、順調にプログラムを遂行できるのかと不安に思っていました。その後グルー

プメンバーや現場の先生からの協力を得ながら、無事にプログラムを実行することができました。そこで気が付いたのは、異文化教育の専門家でなくても、異文化教育をテーマとした教師教育プログラムを実行できるということでした。すなわち、現場の教師に何かを教えるために、該当する分野のエキスパートにならなくても、教師教育者はその役割を果たすことができるということです。現場の先生のニーズを聞き出したり、該当する分野の専門知を持つエキスパートの力を借りたり、それを自身の持つ教師教育理論と融合したりすることができるのです。つまり、コーディネーターの役割を担えばいいです。今回の実践を通してコーディネーターこそが自分が目指している教師教育者の役割であることに気がつきました。

## 注

1. 役割分担の割合：成利楽 70%；道法愛 30%
2. 教師教育者のL氏は中国の日本語教育の専門家で、『指南』の作成に携わっている人物です。
3. 文化現象、テキスト、製品とは文化的な動向や出来事、書籍、記事、詩、小説、ウェブサイト、広告、映画、テレビ番組、物理的または非物理的なアイテムのことです。これらは、文化や社会における様々な側面を理解する上で重要な学習材料です。
4. 異文化コミュニケーションサービスとは、異なる文化背景や言語を持つ人々がコミュニケーションを取るために提供する翻訳、通訳サービスのことです。
5. ここでは、母語話者と非母語話者教師の授業実践を比較したいというつもりでわざわざ日本人と中国人にしたというわけではありません。中国の教育現場では、日本文化関連の授業の多くは日本人教師が担当しています。ただし、日本人教員のいない大学もあります。本調査ではインフォーマントのことを考慮して、違う国籍の先生に依頼することにしました。
6. B先生は大学時代に「5月5日になると、日本人は家の前で鯉のぼりの旗を掲げる習慣がある」ということを教科書から学びました。しかし、彼女は、日本に留学して町中を歩き回っても、鯉のぼりをほとんど見かけなかったそうです。
7. 曾琴先生は本プログラムの共同活動者の一人で、中国における異文化教育実践に長年携わってきました。
8. 『指南』における思弁力の定義：思弁力とは、分析、推理、帰納、判断などの認知活動を通じて、問題について深く考え、合理的な結論を導く能力のことです。言語学習の中で、思弁能力は学生により良い言語知識を理解するだけでなく、学生の言語運用能力と交際能力を高めることができます。

## 参考文献

- (1)葛茜 (2015)「中国の大学日本語専攻教育における文化教育の実態とその課題:『日本概況』という授業を中心に」『早稲田日本語教育学』(17) 21-39
- (2)中国教育部 (2020)『高等教育段階日本語専攻教学指南』外語教学与研究出版社



- (3)佐々木倫子 (2002) 「日本語教育で重視される文化概念」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』(細川英雄 編)、凡人社、218-234
- (4)周鳴 (2015) 「文化教育と言語教育の融合を目指して—中国武漢における日本語教育の場合」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』(52) 1-21
- (5)中尾有岐 (2016) 「21世紀型スキル育成を目指した学習者体験型教師研修 —タイ人中等教育教師の気づきと学び」『国際交流基金日本語教育紀要』(12) 41-56
- (6)山方純子・井上正子 (2017) 「日本語学習を必要としない留学生の日本語学習動機—ブラジル人留学生を事例として—」『日本語教育方法研究会誌』(23-2) 14-15